

四魂に就いて

—宣長と隆正—

山本寿夫

荒・和・幸・奇の四魂、上代人の把持した神靈観に対する現今の解釈は、平素は一神格中に統一せられて別個の行動を見せないが、時と場合に応じてそれが分離し、単独にしかも各別の神格を形成して活動するものであると、通例理解されてゐるのである。例へば神道大辞典のいふところをみると

我が民族が本来神靈の存在を認めたことはいふ迄もない。殊に上代人は神靈の作用に二通りの区別を設けた。即ち和魂及荒魂がそれである。和魂とはこれが平和・仁慈の徳を、荒魂とは勇猛・進取の作用を有せるもので、前者は靜止的もしくは調節的、即ち常の状態にあるを指し、後者は常の状態から脱出した活動的もしくは荒びすぎたる状態を指す。蓋し我等人間の日常生活の上にも平静と活動との二方面がある如くである。殊に古代人はその作用を起さしむるものに各別の原動力が対立的に存在するものと信じた。平素は一神格中に統一せられて別個の行動を見せないが、時と場合とに応じてそれが分離し、単独に而も各別の神格者として働くものと

せられた。例えは神功皇后三韓征伐に當り、神々の荒魂は皇軍の先鋒となつて王師を導き、和魂は皇后の御身に添ひて皇船の鎮めとなつた。斯く兩者を各別に考へた結果、之を祭祀するに當つても和魂のみを祀つたもの、荒魂のみに止つたもの、また和魂に荒魂を附けて祀つたものがある。荒魂のみを祀つた例は、奈良時代の末、天平宝字八年一言主神を土佐から迎へて大和に祀つたのは荒魂である。そして土佐には都佐坐神として和魂が祭られてゐる。住吉神にしても長門にあるのは荒魂神で、攝津のは和魂神である。和魂に荒魂をつけて祀つた例は、大己貴神の和魂を大物主神の御名のもとに大神神社に祀り、その荒魂を附近の狹井神社として祀つた。(中略)なほ和魂より分れて現れたものといはれるものに、幸魂と奇魂とがある。幸魂は幸さいくあらしむる魂、即ちその身を守りて幸あらする意。奇魂は奇くずしき徳を以て萬事を知り辨へ種々の事業を為さしむる魂といはれ、大己貴神が自らの靈を大神神社に祀らしめられた如きがそれである。

といつておるのである。又この説明中には本居宣長の古事記伝の説を直接引用し説明してゐる所もある如く、大体において、宣長の流れを

汲んで四魂を一神靈の徳用、作用、働らきと解釈しておると見て差支へない^②。即ち神靈そのものが二つに分れ神靈の本体と現出と見る解釈——垂加神道の系譜に属する淡川春海、谷泰山等の説——は捨て去られて、専ら復古神道の系譜に属する説が採用されておるのである。

さてこの荒・和・幸・奇の四魂の語が文献にあらはれるのは、古事記の仲哀天皇の条神功皇后の所謂三韓征伐の条に

故備如教覺。整軍。雙船。度幸之時。海原之魚。不問大小。悉自御船而渡。爾順風大起。御船從浪。故其御船之波瀾。押騰新羅國。既到半國。於是

其國王畏惶奏言。自今以後隨天皇命而。爲御馬甘。每年雙船。不乾船腹。不乾桅檣。共與天地無退任奉。故是以新羅國者。定御馬甘。百濟國者。定渡屯家。爾以其杖衝立新羅國主之門。即以墨江大神荒御魂。爲國守神而祭

鎮選渡也。

とあるものや、日本書紀卷九の同じく神功皇后の三韓征伐の条に

皇后曰、必神心焉、則立三大輪社、以奉三刀矛一矣、軍衆自乘^略、既而

神有^レ誨曰、和魂服三王身、而守三壽命、荒魂爲^レ先鋒、而導三師船、^{和魂}此云三阿邇多摩、^{荒魂}此云三阿邇多摩、即得三神教、而拜礼之、^略既而則擣^レ荒魂、爲^レ二軍先鋒、^略請^レ三和魂、爲^レ二王船鎮。

とあるもの、又幸魂・奇魂については、大國主命の國土経営がその幸魂・奇魂によって成功しかつそれが祭祀されたのが大三輪神であることが物語られる書紀の条に

自後國中^レ所^レ未^レ成者、大己貴神独能巡造、遂到^レ出雲國、乃興言曰、^略中略此國、唯吾一身而已、其可^レ三与^レ吾共理^レ天下、蓋有^レ之乎、于^レ時神光昭^レ海、忽然有^レ二浮來者、曰、如吾不^レ在者、汝何能平^レ此國、乎、由^レ三吾

在一故、汝得^レ建^レ其大造之績一矣、是時大己貴神問曰、然則汝是誰耶、對曰、吾是汝之幸魂奇魂也、大己貴神曰、唯然、^略知^レ汝是吾之幸魂・奇魂一、今欲^レ三何処住^レ一耶、對曰、吾欲^レ住^レ於^レ日本國之三諸山一、故即宮^レ三宮彼処一使^レ三就而居^レ此大三輪之神也

とあつて、書紀を読む者の注意をうながす所であり、又古事記伝が引用してゐるやうに出雲風土記には

天神千五百萬、地祇千五百萬并當國靜坐三百九十九社及海若等、大神之和魂者靜而、荒魂者皆悉依給、^{三三}

とあり、又前記日本書紀卷九神功皇后の三韓征伐の条につづいて^{ムコト}

^略前皇后之船直^レ指^レ三難波^一、于時皇后之船廻^レ於海中^一、以不^レ能^レ進更^レ遷^レ務古水門^一而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不^レ可^レ近^レ三皇居^一當^レ三居^レ御心廣田國^一、即以^レ三山背根子之女葉山媛^一令^レ祭、亦稚日女尊誨之曰、吾欲^レ居^レ三活田長峽國^一、因以^レ三海上五十狹茅^一令^レ祭、亦事代主尊誨之曰、祠^レ三吾于御心長田^一、則以^レ三葉山媛之弟長媛^一令^レ祭、亦表筒男、中筒男、底筒男、三神誨之曰、吾和魂宜居^レ三天津渟中倉之長峽^一、便因看^レ三往來

船^一於是隨^レ三神教^一以鎮坐焉則平得^レ渡^レ海、

とあるのであるが、これ以外のものとしては、神名帳、三代実録等にわづかに散見するのである。しかしそれ等は単に神名に関はるもののみであつて、その働きや本質についての記載はないといつてよいのである。荒・和・幸・奇の四魂について考察する上においては、記紀等文献に現はれる資料は非常に僅少であり、むしろ稀有といつてよいのである。したがつて古來之に關する研究は数少なく、又徹底した研究をなしたものはほとんどないと言つても過言ではあるまい。しかしながら國学、復古神道の掉尾をかざる大國隆正においては、その神道思

想の中核を爲す所の天御中主神の「なか」と共にこの四魂の「あら」「にぎ」「さき」「くし」に関する考察は重要なものとなつており、且つ「なか」の考察と深く相関連して、大國神道一本学の中軸を形成してゐるといつてもよい部面をもつておるのであるからその師本居宣長の學説と比較しその進展のあとをここに見ようと思ふのである。

二

先づ本居宣長の説をみることにする。その著古事記伝三十に

③ 荒御魂、和御魂、荒御魂の事、書紀ノ此ノ御卷に、此ノ大神の御誨に、和魂服ニ玉身ニ而守ニ寿命一、荒魂爲ニ先鋒一而導ニ師船一とありて、和魂此ヲ云ニ坪技彈多摩一、荒魂此ヲ云ニ阿遲瀾多摩一と注し、出雲風土記に天神千五百萬、地祇千五百萬、并當國靜坐三百九十九社、及海若等、大神之和魂者靜而、荒魂者ハ皆悉依給云などあるを以て、二御魂のさまを知ルべし。書紀神代ノ卷に、幸魂、奇魂とあるは、共に和御魂の徳用を云る名なり。(中)幸魂を荒魂に、奇魂を和魂に當たるは、非なり。

といつて先づその用例をあげて考察の資料を示して、更に

④ 凡て爾岐と、阿羅とを對言こと多し、和多間・荒多間、和稻・荒稻、和海布・荒海布、毛柔物・毛龜物(爾基は爾岐と同言なり)などの如し、此ノ和荒に、種々の意ありて、荒金荒玉などの類は、物の生れるままにて、未ダ修治を加へぬを云、其に對へて修治したる物を、和某と云、(注)又物の愈きと精きとをも云、強きと柔なるとをも云、又人ノ家などの、荒ると、饒ふと、又浪風の騒ぐを荒ると云、靜まるを和くと云、神の心をなども荒ると云と和むと云、(那具・那岐・那基牟なども、爾岐・爾基・爾

基牟など、同言なり)さて又物の間隙の間遠なるを龜しと云(注)遣放るを荒ぶと云(略)分散をあらくと云、(此レに對へて、和云々と云言は、未ダ思ひ得ず、大かた爾岐・阿羅の右のくさくさを、漢字にていはば、生熟、精龜、疎密などに当れり、其中に、疎を阿羅と云ことは多けれども、其對に密を爾岐と云ことは未ダ思ひ得ず、爾岐波布などは是レに近し、又剛柔の柔をば爾岐と云へども、其對の剛を阿羅と云ることはなし、柔の對の阿羅は、強暴などの字に當れり)右の種々を思ひわたして、和御魂、荒御魂てふ名の義を度り知ルべし。

と云つて、「にぎ」「あら」の語義を諸種の用例多数より帰納的に決定しようとするのである。これは宣長学の性格よりくる、当然の結果であらう。しかしながらここにおいて注意されなければならない点は、「あら」と「にぎ」が特に対比的、対称的に取り上げられてゐるといふことである。と共にそれは単に、あくまでも対比的に、対称的に取り上げられ、考察されるにとどまつてそれ以上にはすすまない、兩者により深い関係、有機的な関連をつけて考究してみようとしてはおらない点である。なほ古事記伝はつづいて

⑤ さて神の御靈を、此ノ二ツに對言は、ただ其ノ徳用を云フ名にこそあれ、全體の御靈は御靈にして、必しも此ノ二ツに分れたる外、無きには非ず、嚮に或人此ノ二御魂のことを問へりしに、己レ火に譬へて答へたりしことあり、其れまづ一ツの火あらむに、其を分取て、燭と薪とに、着れば、燭にも薪にも移りて燃れども、本の火も亦滅ることなく、滅することもなくして、有りしままなるが如く、全體の御靈は、本の火にして、和御魂荒御魂は、燭と薪とに移し取りたる火の如し、然るを世ノ人此ノ義を知らず、全躰の

御魂を、此ノ二ツに分けて、其ノ片ツ方荒魂なれば、今片ツ方をば、おして必スと和魂と心得るは、非なり、たとへば伊勢の荒祭ノ宮は、大御神の荒魂に坐せども、然りとて本宮は和魂と申す物にはあらず、全骸の御魂に坐せり、又津ノ國廣田ノ神社も、天照大御神の荒魂なり、如此同神の荒魂の、一ツに限らざるも、彼ノ火をいくつも薪に分ケ取りたらむが如し、又大和の大三轮は、大國主ノ神の和魂なるに、狭井ノ神社は、其ノ大三轮ノ神の荒魂なるは、和魂ノ神に、又荒魂あるなり。此は彼の分ケ取りたる燭の火を又分取りて、薪に移したらむが如し、さてかく大國主神は、大和ノ國に和魂も荒魂も坐せども、出雲ノ國ノ杵築ノ大社も、亦同神ノ御魂に坐は、本の火もなほ本のままなるが如し、是れ又三轮の和魂なるに對へて、おして杵築を荒魂とせむは、非なり、杵築は全骸の御魂に坐スこと、上に引る神賀詞の文のさまにても知ルべきなり。

と述べて、和魂・荒魂をもつて一靈の徳用いばば靈の働らき、靈の作用と認識して、いはば、一靈の本体、二魂の徳用と考へてゐるのである。しかしながらその働らきの内容を深めて考へたり、或は働らきそのものを展開して、これを事物全般の現象とか、宇宙天体の運行、或は人事社會道德の問題にまで及ぼすといつたやうなことは全然考へられもしておらないのである。又古事記伝十二においては

⑥ さて幸魂奇魂は、共に和魂の名にて、幸奇とは、其ノ徳用を云なり、二魂にはあらず、幸魂を荒魂とし、奇魂を和魂とするは非なり、其故は、若シ二ツの魂ならば、二神と現れたまふべきに、今現たまふ神は一柱なり、且出雲國ノ國造ガ神賀ノ詞にも、倭の大美和に祠るは、此ノ神の和魂とこそ見えたれ、さて幸魂とは、私記に、是レ左支久阿良之无留魂也と云て、字の如く、其の身を守りて幸あらする故の名なり、書紀神功ノ卷に、和

魂服ニ玉身ニ而守ニ寿命ニとある、是レ其ノ意なり、是レにても幸魂といふも、和魂の徳用なることをさとれ、奇魂も、字の如くにて、奇靈徳を以て、萬ノ事を知識辨別て、種々の事業を成さしむる故の名なり、万葉五に、可武佐備伊麻須久志美多麻とあるは、石を称て、奇き御玉と云るなれば、魂のことに非ず、即上に真玉成二の石とあるを以て知ルべし、さて今大國主神の己ノ命ノ独りしては、此國を得作竟じと愛賜ふは、書紀に、理ニ此國ヲ一唯吾一身而已、と云てほこりたまふも同く、ただ荒御魂のみすすみて、和御魂の乏しかりしなり、故し今神産巢日ノ神の御量にて、(萬ノ事を成しむるは、皆此ノ神の御靈なり)、別に其ノ和魂の御形を現はして、如此示し教へしめたまふなり、かくて此ノ教への隨に齋き祠りたまふに因て、和魂満足し榮坐して、其ノ御身を守り幸へたまひ、奇靈しき徳を以て、遂に天下を作竟しめたまふ、故し是レを幸魂奇魂とは云なりけり。

と述べておるのである。これは幸魂奇魂が結局和魂の徳用であり、荒魂和魂と対称対立して独立に考察すべきものではなく、幸魂奇魂は単独で一神格を形成するものではないとされてゐるのである。即ち幸魂奇魂は荒魂和魂と同格のものではなくて、あくまでも和魂の徳用であり、働らきである、といふのである。いふなれば幸魂奇魂の徳用をもつた和魂が荒魂と対立しておるのであり、この二つが一靈の徳用とみなされてゐるわけである。宣長は日本書紀を「漢籍意にのみなづみて潤色おほき」ものとしてしりぞけ古事記をもつて「古の正実のありさまを知るには第一に学ぶべき古典」とするべきであると考へるのであり古事記をもつて「あるが中の最上たる史典と定め」るのであるから、その古事記に幸魂奇魂の記載がないのであつてみれば和魂荒

魂の対比対称的考察にとどまつて奇魂幸魂をそれと同一線上に並べて考察しようとするのはむしる当然のことといへよう。要するに宣長においては四魂はあくまでも和魂荒魂の二魂であつて、これは対比対称的に考察され理解されるべきもので、それも一霊の二徳用として対比対称的に理解されるべきものであるとされておるのである。しかしながらここにおいては古事記を主体とした古典の古語の総合解釈の基盤の上に立つて、それを荒和二義に関連して対比的に整理考究することによつて到達するを得た古意の解明、古典の世界における上代人の意識の解明にとどまつてゐることは注意しておかねばなるまい。だからこそ今一步これを展開して、和・荒を考察するにも単なる対比にとどまらずこれを有機的に一元的に統一的に関連せしめて理解するやうにはその説を進展せしめないのである。したがつて又和・荒二魂のそれぞれについても諸種多数の語義はこれを集めて検討はするもの、これを統一的系統的に整理し、有機的に関連づけて一つの体系にまで形成するといふやうなことはしておらないのである。宣長は古典の世界に分け入つてこれがあるがままに明らかにすることはまことに克明になつてゐるのではあるが、決してそこから出て来ようとしてはおらないのである。ここに宣長学の性格があり、又限界があつたと言つてよからう。

三

次には大國隆正の説くところをみることにする。本学拳要、これは大國本学の綱要ともいふべきものであつて、安政元・二年隆正六十三

・四の時の著とおもはれるのであるが、それによると次のやうな詳細な解説がみえてゐるのである。

⑩ あらみたま・にぎみたま・さきみたま・くしみたまといふことあり。これは、神にも人にもあるものにて、支那の窮理家も西洋の窮理家も、未だしらぬ神理の妙なり。

と述べており、ここに既に四魂が同一同等に並列して考究され、しかも「神にも人にも」として古典における神の世界のみならず、現前現実の人の世、人間の心中にもその考察の目が指向されてゐることを明らかに示してゐるのである。そしてその指向点は又「神にも人にも」共通すると共に、「西洋の究理家も支那の窮理家も未だしらぬ」理なのである。又その理は勿論四魂を貫通したものであり、四魂を窮めることによつて明らかにすることが出来るのであり、またその考察はこの理の根拠によつて、その理の方向に随つてなされなければならない。かういふ隆正の態度が明らかに現れてゐるのである。これはまさに宣長と対蹠的な態度であらう。つづいて本学拳要は、

⑪ まづこのあらみたまよりとくべし。あらといふことばに二の義あり。また三の義あり。二の義とは荒^ア、疎^スなどいふたぐひのあらと、あれをとめ、あれつくなど古言にいひて、よく上に仕へ奉るをいふあらと、ふたつなり。(中) 三の義といふは、生の字をあつるあれ、有の字をあつるあり、廢の字をあつるあれ、これなり。ものみな生れいでて世に有り。つひには廢ることあるものなり。これを初・中・後とみるべし。これに前の二義を合せ考ふれば暴るればやく廢れ、奉仕れば永く有り。

あらみたまのあらに対して宣長のごとく荒、疎、以下の語義を考へ

てゐるのであるが、ここではやくも隆正は、これれ等の語義を統一し
 関連づけてゐることがわかるのである。更につづけて、

⑬ あらみたまは生靈のこゝろにて、人のうまれいづるはじめより、もちて
 うまるゝ靈をいふ。これに暴と奉仕との二義をもちてうまるゝものなり。
 わがこゝろにかなはぬことあればある(暴)こゝろおこる。父母に奉仕
 るこゝろ、君に奉仕するこゝろ、夫に奉仕するこゝろはすべて本につくこゝろ
 これなり。暴るゝときは奉仕するこゝろをうしなひ、奉仕るときは、暴るゝ
 こゝろを失なふ(略)さればあらみたまに、本につくあらみたまと、もとに
 つかぬあらみたまとあり。奉仕の字をあつるあらは、本につくあらみた
 ま。暴戻の字をあつるあらは、本につかぬあらみたまと、わきまへおくべ
 し。

ここに「本につく」といふのは本学舉要下巻の巻首に附した隆正の和
 歌「本につきかたみにすくふ日のもととつをしへぞみちのもとな
 る」が簡明に示してゐる如く彼の神道の経緯をなすものなのである。

この経緯にひきつけることによつて、あらみたまは人の問題、「人の
 こころ」の問題とされてゐるのである。かくて

⑭ 忠・孝・貞の奉仕靈をつよくもちてうまるゝ人は、我をたつる暴戻靈
 をみづからしりぞけ、我をたつるあらみたまをつよくもちてうまるる人
 は、忠孝貞のあらみたまを、おしのくるものなり。これは實事に證してた
 がはぬものになん。

といつて現実の道德の問題におちつくのである。實事といつてゐるの
 は文献上のことではなくて、現実目前の事実上の事象のことであるか
 ら、この事に徴しても既に隆正は古典の世界より現実の世界に出てき

てゐることに注目しておくことが必要であらう。さて、このあらみた
 まに對比してにぎみたまが説かれなければならない、本学舉要はつづ
 いて

⑮ その我をたつる暴戻靈をしづむるものは、たゞしきにぎみたまなり。に
 ぎみたまもまた、人ごとにもちてうまるゝものにして、これもまた普悪あ
 り。にぐる・にぐるなどいふことばよりいづるにぎみたまは、つたなく、
 にぎはふ・にこむなどいふことばよりいづるにぎみたまは、ただしきな
 り。これはあひたすくる道を成就せしむるたましひになんある。あらみた
 まは本につく道をなすものなり。にぎみたまは、あひたすくる道をなすも
 のなり。このふたつくみあひて、世のため、人のため、中道を得て、神と
 なるものになん。にぎみたまのたゞしきは、あひたすけ・あひすくふこゝ
 ろ、ゆきわたりて、悪をたすけず、善をたすくるものになんある。にぎみ
 たまのつたなきは、かれがつよきをみておそれをのゝき、にぐるこゝろを
 おこすたましひなり。このとき、あひたすけ・あひすくふこゝろを失なひ
 て、われのみたすからんとす。暴戻心の附本心を失なふに對して、拙弱心
 の相扶心を失ふ理をさとるべし。あひたすけ、あひすくふときは、にぎび
 ・にぎはひ・にげ・にぐるときは人をあひたすけず。

これをみると、にぎみたまにおいても全くあらみたまと同様にしか
 もあらみたまと對比して説かれてゐることがわかるのである。本につ
 くが大國本学の経であれば、あひたすくは実にその緯であるのであ
 る。さて幸魂奇魂については如何であらうか、

⑯ こゝにまた、さきみたま・くしみたまといふことあり。さきみたまは、わ
 がたまのわかれて、人の身にいるなり。くしみたまは、人のたまのわが身に
 いるなり。神力應護は、かみのみたまの、われにいるものにして、これをも、

しみたまといへり。(中略)人の世になりても、人ごとにさきみたま・くしみたまありて身をたもち、世をたもつものになん。さきみたまは、われよりわかれて人の身に入り、さきよりさきへうつりゆくたましひなり。こゝろにおもふことを、くちよりいひいだす。いひいだすことばは、わが身のさきみたまなり。わがさきみたまは、人の耳に入り、人のさきみたまは、わが耳に入る。わが耳に入るをくしみたまといふなり。われよりいづるをさきみたま、われに入るをくしみたまといふなり。われよりいづるをさきみたま、われに入るをくしみたまとおぼえおくべし。まづしかおぼえおきて、この二つの妙用をしるべきなり。このさきみたま・くしみたまにも善悪あり。その善悪は、皆かのあらみたま・にぎみたまの善悪より、うつりくるものになん。さればまづあらみたま・にぎみたまをたゞしくしづむること、人道の肝要なり。これにより、朝廷に鎮魂祭といふことあるなり。

これによつてみれば幸魂奇魂も荒魂和魂と全く同様な説き方であり、同一の場において述べられており幸魂奇魂を和魂の二徳用とする宣長の立場とは明らかに異つてゐるのである。しかしながら、「さきみたま・くしみたまにも善悪あり。その善悪は、皆かのあらみたま・にぎみたまの善悪より、うつりくるものになん。」といつて、幸魂・奇魂と荒魂・和魂が表裏一体をなして相関連し次にここには引用しないが長にきわたつてそれらが互にはば函数的に消長するものであることを説いてゐるのは彼の四魂を統一する方法が如何なるものかをみる上に特に注目すべきであろう。本学拳要は又次のやうにも説いてゐる。

⑩ あらみたまは、うぶのたましひなり。うぶのたましひには、たれもみな忠・孝・貞の三つをそなへざるものなし、としをとるにしがひ、よき人のさきみたまを、きき入るゝこともあるにより、くしみたまつぎつぎにい

できて、わがためをのみおもふは、はづべきことなることをしり、我をたつるあらみたまはたちがたきかたあるものなることをつぎつぎにさとり、十歳にもあまれば、これをしりぞくることを、つぎつぎにおぼゆるものなり。(中略)人はすべて忠・孝・貞のあらみたまをむねとして、拙弱のにぎみたまをさり、家職・産業のにぎみたまをむねと古人のさきみたまを、わがくしみたまにして、わが身ををさめ、わが家をとゝのへ、それをまた、わがさきみたまにして人ををしへさとして、人に善事をなさしめ世をあまねくたすけすくふべし。

ここに至つては正に全く、四魂における神道説であり、現実の人間を規範する道徳律である。以上本学拳要の引用いささか長きに失したけれどもこれによつてみれば、隆正においては前述の如く四魂は明らかに同一の平面において把握せられ、しかも互に対比的に相関連して理解されてゐることが明らかになるであらう。又注目すべき点は宣長の立場とちがつて、荒・和・幸・奇その一つ一つにおいても諸種多数の語義がただ単に並列的にならべられるのではなくて、これ等は有機的に強く関連づけられ、表裏一体をなしいはば函数的に消長するものとして把握されて一つのまとまつた体系にまで構成されてゐることである。「馭戒問答」において「本居流は、いたづらに古事を信じてその理をとかず」と宣長に対して批判をくはへた隆正の理を重んずる態度が明らかに現れてゐるといふべきであらう。またここで説かれてゐることはたとへその資料とするところが古典のものであつても、説かれてゐる内容、或は指向されてゐる事象は全く現前の事実であり又理であつて、それは現在現実の人間を律する神道説にまで構成されてゐる

といひ又「古伝通解」卷四には

⁽²²⁾ クシミタマは混かり・合ひ・集まるをいひ幸靈はわかれ・離れ・散るをいふ。分れてまた混かる。これにより大國主神のサキミタマ、大物主神とあらはれたまへるとき、みづから、ながみことのサキミタマ・クシミタマとのたまへり。サキミタマはわかれたるをいひ、クシミタマはあつまりて一神となれるを、のたまへるものになむ。水戸神の八柱、そのみたまを合せて一神となり給へるを、クシミタマノカミといへり。これをもて、混分につきてサキミタマといふ名あり。集合につきてクシミタマの名あることをしるべし。これによりて稽ふれば、タカミムスビノカミ・カムムスビノカミは、天御中主神のサキミタマになんおはしましける。うちをいふなかわかれてタカミムスビノカミとなり、間をいふなか分れてカムムスビノカミとなりたまへるなり。クシミタマはあつまりより、サキミタマはわかれゆく。この図(略)につきて中點を主としてサキミタマをおもひたまへ。間をいふなかは内をおし、中點をおすこゝろあり。これによりカムムスビノカミとなりたまへるなり。内をいふなかは内より外をおすこゝろあり。これによりタカミムスビノ神となりたまへるなり。高は長たるはてをいひて、その究竟にあたる。まことはその下よりは、^{モト}じめていふことばなれば長の字にあたり。

とあつて、主として幸魂奇魂を説くところにおいても亦離合、混分、集合、さらにはまた「たく」といふ理において二魂の意義が整理され、結局「なか」といふ語に收斂されて理解されてゐることが明らかであらう。しかもこれは神代の神事のことであるとともに「本教は儒佛の教と同じからず。その教の大むねは、天地のはじめに神靈ありて、天地をつくりたまへるとき、日球を緯星天の本とし、日本国を地

る点は着目すべきであらう。古意の解明に終始して、これを一理にまで体系化し、それをもつて現実社会を強く律する規範たらしむるといつた事をしようとしなかつた宣長とこの点において隆正は全く対照的なのである。すくなくともこの四魂に關するかぎりにおいては宣長は、古典における古意の解明が主であり、隆正は現前の人間を律する理法の探究、神道説の構成が主なのである。極言すればむしろ隆正の場合、彼の既に構成され体系化された一神道説の一面がたまたまあらみたまへにぎみたまといふ機縁にふれることによつて吐露されたのであるといつたがよからう。さてこれまでは荒魂・和魂を主として検討してきたのであるが次には幸魂奇魂を主としてみよう。「魂魄辨」に

⁽¹⁹⁾ 古來サキミタマに幸魂の二字をあてて書來たれど、サキミタマの本義にあらず。

といひ又

⁽²⁰⁾ クシミタマに奇魂の二字をあててかき來りたれど、これもまたクシミタマの本義にあらず。

として幸・奇の二漢字の字義にともすればひかれがちであつた古來の諸説をまづ斥けて、つづいて、

⁽²¹⁾ 事々物々離合にあらざるはなし。タカミムスビのタカは長け・長く^{タケ}と活らくことばのこころにて離すなり。カムムスビのカムは上下左右より中點をおすこゝろにて合するなり。離してこれをかれに合せ、これと合せてかれと離す。サキミタマは、此をはなして彼に合するなり、クシミタマは、かれをはなして此に合するなり

球の本とし、わが 天皇を國王どもの本とし天・地・人の三本をこゝにたてて、天地をつくりなし(略中)天地のなりたちをときて、そのうちに人の行ふべき道をも、をしへてあるものなり。」といつてゐる如く、この理はまた現前の自然界にはたらいてゐる理法であり、人間界を律する規範でもあるのである。ここに神界自然界人間界を貫通して支配する理法を考へる隆正の学—本学—の性格の一端があらはれてゐるといつて差支へないであらう。前述の如くこの点こそ宣長学と著しい対照をなしてゐるのである。「本居氏・平田氏共にこれらのことを解せず。いまの天地に合せずして天地のはじめをとかれしにより、その説ゆきとどかざるなり。」といふ彼の言はかかる所から出てくるのである。又本学拳要下巻において、

^{②⑤}今の世の國学者は、むねと考證をするなり。考證はいかにもよきことなり。せではならぬものになん。しかはあれど、考證に大小の差別あり。他の先生たちの考證は小考證にして、いま隆正がする考證は、大考證なり。小考證は書籍を考證にする考證なり。隆正が考證は天地を考證にする考證なり。後世にいたりては、書籍多きにより、いかほども、書籍の考證はなりぬべし。神代の事は、外に考證すべきものなし。天地を考證にとるより外は、せんかたなきものになん。これにより隆正は天地を考證にとりていふなり。また外國の古説を考證にとりていふなり。小考證に泥める國学者たちは、隆正が説をきゝて考證なしといひ、牽強附會とそしるなるべし。そは考證に大小あることをしらぬ偏見なりけり。

と揚言する隆正の言葉には、考證はしなればならぬ、しかしいくら考證考證といつても文献にのみ頼るものであれば字義の解明以

上のものには決してならない。それも文献のある時代のものは出来るが、文献の皆無の時代のものは如何ともしようがないではないか、研究方法をあらためて今も古もかはらぬ現実の現象の觀察と考究、それによつて古典の伝へる所をあらためて見ようではないか、さうすれば、神話は古伝であり、直ちに宇宙の構成原理であり、神々の働らきは天体の運行であり、人間心理のはたらきであり、社会の原理であることが確かに明らかになるであらうといふ彼の気合がこもつてゐるのである。これは又彼の立場と宣長の立場を考證の一言において画然と分けて見せたものである。これで見れば四魂における考察の態度が異なるのも当然であらう。

四

前述の如く隆正においては神界自然界人間界を一貫する理において四魂をも説明しようとしておることに注目されるのであるが、既に前にもふれておることであるが

^{②⑥}邪引をマガツビノカミとし、正引をナホビノカミといふ。これやがて天の御中主の分靈にて、天照大神稚産神のアラミタマにておはします。アラミタマにふたつあり。邪引と正引とこれなり。この八神のウムスビノカミをまつりたまふとき、このナホビノカミをくはへてまつりたまふことは、元後をむすびて、人一人をむすびだし給ふとき、正引をもて邪引をオ押しだせとなり。邪引をおすは正引の張力なり。正引二力は縮性なり。張力は抃性なり。

といふやうに、アラミタマの解釈をなすにいたつては全く力学的なと

でもいふべき様相を示してゐるといつてよいであらう。既に言及した如く実はこれ、彼の独創的神道——天之御中主神の道理を中心としてこれより演繹して天地萬物過現未あらゆる事象を体系的に理解し解釈せんとする神道の一部分であるからなのである。このことは既に述べた所で明らかになつてゐるがいま一つ引用すれば

②⑦ 天之御中主神のことをくはしくとくべきなり、なかついふことばに三つのわかちあり。かたよらぬをいふなかりあり。うちをいふなかりあり。間をいふなかりあり。箱ノナカナドイフハ、ウチヲイフナリ。中垣ハ間ニアル垣ヲイフナリ。以後中・内・間ト文字ヲ書分テ、ソノ意ヲシラシメントス（中央ハカタヨラヌナカナリ。内ハ外ニ対ヘテイフナカナリ。間ハ内外ノナカナリ。）圓形は、萬物・萬事、萬物をうみ出すところにて圓形は三つのなかあひてなれるものなり。天之御中主神は、かたよらぬなかにあたり、高御座巢日神は、内をいふなかにあたり、神産巢日神は、間をいふなかにあたりたまへり。これによりて考ふれば、高産巢日神は天之御中主神の荒御魂にて、神産巢日神は和魂にておはしましけり。又之にむかへて考ふれば、天之御中主神は、天地の幸魂・奇魂にておはしますなり。天之御中主神、さきみたまとは、本をはなれてわかれいづるたまをいふ、この神は、本天を別れたまへるさきたまなり。あらたまとは、たちのびてあらはれゆくたまをいふ。生長にあたる。にぎたまは、みづから制してたちのびさせぬたまをいふ。かむにあたるくしたまは、つらぬくたまなり。内・間をつらぬきて、これをまた中點として、又内・間を外へ造りいだす、(略下)

と述べてゐる。これによつてみると天之御中主神のなかの語義に三義あるのに着目し、これらを中心・内包・境界と解釈し、これこそ萬事

萬物の存在の理法であるといふのである。存在の形式であるといふのである。だからこそ宇宙間一切の事象はこのなかによつて成り立つのであるとする。即ち天体にあつては銀河系中の太陽系、太陽を中心とする太陽系、又太陽系中の地球と月との關係、これ等皆これであり、これら天体のそれぞれを神名にうつして言へば直ちに古典にとかれてゐる神々の働らきであるから神々の理法であり、これを「顕露界にうつしていへば」即ち人間界でみれば君主を中心とする臣民の關係であり、之をわが心理にうつして言へば道を中心として心と事との關係であるとしてゐるのである。これはいはば力学的な解釈とでもいふべきものであらう。これによつてみても隆正が一つの簡明な理法を想定しこれを或は古典に或は宇宙天体に或は人事に自然に適用して萬事萬物を説明しようとしてゐることは明らかであらう。実はそれが天之御中主神のなかであり彼の神道なのである。したがつてかくの如き神道の展開の一部として荒・和・幸・奇の四魂も説かれるのである。これらの事情は次の引用でも明らかであらう。学運論に

②⑧ これらの神名によりてかむがふれば唐土にて太極生二兩儀二陰與陽といへるは、この天ノミナカヌシ・タカミムスビ・カムムスビの三はしらの神の妙用をいへるものにぞありける。西洋人が張力・引力・圧力などいふも同じく、この三柱の神の妙用をいへるものなり。しかはあれど外國にはすべて、天地をかみのつくりたまへるまことの傳へなきにより、ただそのかげをとらへていふものなりけり。今萬物に、三つの中あり。張るとおすとの妙用をそなへてあるをおもへば、佛家にて悉有二佛性一といひ、儒家にて物々有二太極一といへるは、又よくかげをとらへたるものになんある。わ

が國のことばにてこれをいへば、サキミクタ柝靈とも分靈ともいふべきものなり。

おのれも又物々有三神一ととくことなり。かれは根元よりおしくだして物々有ニ太極二といふ。これはまた萬物の中を發明して、おしあげて一物の中をしれるものなり。神代卷に一物とあるは本なり。萬物はす多なり。

よくその本末をしりて末をもととおもふべからず。かくのごとくときほぐしてみれば、物々に三神のみたま、わかれておはしますなるに、人身には経緯三段の中あり(下略)

とあるのである。これ迄の引用で既に明らかになつてゐる如く、ここにおいても古典における古意の解明のごときはもはや問題ではなく古典を機縁として構成された彼独特の宇宙觀・世界觀・人生觀を貫通する壮大な神道が形成されてゐるのを見るのである。宣長をへだたることはるかに遠いといつて差支へないのである。かくては隆正が

²⁹本居先生の古事記伝は、古言の考證ゆきとどきて、いとめでたし。しかはあれど、神名をとくに通略延約をもてしひごとせられしは、あかぬことです。吾國の理といふことも、道といふこととでもなかりしこととして、それをいはれざりしは、いまだ此学業のはじめにて、かの儒佛の道・西洋の窮理にまされる理道のそなはりてあることを明らかにたまはざりしなり。

と宣長に批判を加へるのもかくの如き隆正の立場においては当然のことであらう。正に隆正においては「あめつちのあひだのこと、ただなか」といふことばより外はあらぬなり。皇國も、もろこしも、にしぐにも、君も、民も、人も、われも、とり・むし・けものも、木も、つちも、これを本としてありふるものなれば、この一言にてあめつちを貫くなり。なかは人をたすけすくはんとするものなり。またわれをたも

たんとするものなり。本につきてはこれをなかといひ、ものにありてはこれを道といふ。」のであり、この理なこそ隆正においては学のであつてであるのである。天地の間のことすべてなかなかなのである。

五

これまで述べてきた所によつて明らかであるが、宣長が文献を博搜して四魂の字義を解明し、それによつて古意に到達するを目的とし、又その範圍を一步も越え出ようとしないのに対して、隆正は神代の事実は文献的に考證しようにも考証すべき文献はありやうがない。人間出生以前のことは文献による考証は出来もしないし意義も少ない。それよりも現前する所の宇宙天体の構造・状態・運動を観察し、自然萬物の生成・發展・推移を考究し、人間社会の状況や人間心理の機微に精察を加へることによつて、それ等を一貫して支配する根本原理に到達するであらう。それによつて古典を精細に考究検討するときには、古典には明らかに既にこの根本原理が神事として懇切に説き示されてゐることに思ひ至るであらう。それでこそ古典が神典であるのである。道、道の書であるのである。かくあるのは古典が宇宙萬物生成の神の声を正しく伝來したものであるからであるといふのである。だから彼のいふ意味において、正しく考究され解釈された古典の語る所はそのまま、自然社会人事一切萬物の正しい原理であり道理であるのである。従つて我々人間もこれをふみはずすことは出来ないし、ふみはずせば

必ずそこに不合理不自然を生じ危害を蒙ることになる。従つて人は必ず古典の示すところに背反してはならず、むしろ積極的にこれをおし進めて行かねばならないといふのである。ここに至つては古典の神々の世界の理は直ちに現実の人間界を規制するのである。ここに隆正の神道が成立する所以がある。されば四魂の考究もこの原理の上になつて、原理表現の一部分として考察し説明されてゐるのである。

さてかくの如く宣長と異つた立場にある隆正が、その理、神道を考究し展開してゆく方法は如何なるものであらうか、それはいふまでもなく五十音図を基礎とする活語活用の原理であり、それより展開する反対の理ツイこれである。今それ等について詳述するいとまをもたないが要するに「今、世に五十音図といふものは、いにしへ言霊といひしものなり。古歌にことたまのさきはふくに、ことたまのたすくらくにといへるは、この言霊に、天地間の神理、ことごとくそなはりて、わが日本國の神道をたすくらくすることのあるよしをいへるもの」なのである。其の著神理入門用語訣下巻より少しばかり引用することにする。

ことばはすべて合離・断統を表とし、軽重・歎感を裏としてなるものなり。これを対とす。は・も一対なり。はは離すところなり。もは合するところなり。

古事記のはじめに、天地初發之時とあるを、古訓本には、初發二字にてハジメとよみてあれど、おのれは、はじめておこりしときとよむべくおもふことになん。これはおこりてより、ふたたびねざるものになん。人は、天をしりて、おこすべし。長くねざるものぞかし。な・に・ぬ・ね・ののな、二つのところあり。中処ナカのなと、無しナシのなと是なり。中ナカのなはねて

もおきたつはじめをなし。無ナシのなはねておきたつことのあらぬはじめをなせり。

あ・い・う・え・おの位につきて、あく・あくは天よりし、おくる・おこるは地よりたつことをさとるべし。人爲は地につきて天にしたがふものになん。かたちとはあらぬ神のみちを、かたちなきころに得て、かたちなき年月を歴るは天につけり。かたちある人身、またもの、またところ、これらをかたちあるみに得て、かたちある所を歴またその位を歴るは地につけり。得トクされば歴がたく、へヘさればえがたし、そのうち夜はねてひるはすることあり、來るものあるによりて爲ることあるなり。おきたちておこることをまちてこれをするなり。夜あけてのちすること多かり。(下略)

これらの引用によつてわかる如く、五十音図一音一音の意義とそれの活用変化により、もろ／＼の道理を展開してゆくのである。しかもこの際注意すべきは、前記の引用文でも既にあらはれてゐる如く、その理論の展開においては、常に反対ツイの理が用ゐられてゐることである。反対これは隆正においては最も重要な發想法なのである。彼自身古伝通解において

よろづのことばに反対ツイあることは、おのれいとわかゝりしころ、生アル・麁アルの反対より發明して、つぎて氷・火の反対にこゝろづき、人の頭・木の根をなせるものなることを發明し、それより考へひろめて、かくのごとくくさぐさの神理を發明したるものなり。

といつてゐるのをも明らかである如く、一意あれば必ずそれに対して対立的対照的一意が存し、相互に対立し関連し反対に働くのであ

る。而してそれ等を大きく整理統一する原理が存しており、又それに對しても對立的に對照的に働らくものがあるといふやうに展開してゆくのであり、所謂正・反・合の弁証法的展開にも似通つたものとも言ふべきものである。これこそ隆正の神道の全般を通じてその根幹をなす理論の展開方法なのであり、又彼の神道説をして特徴づけるものなのである。最も重要な着眼点とすべきところであるといつてよいのである。ところが我々は既に宣長が前述の如く古事記伝において

凡て爾岐と、阿羅とを對言こと多し、^三此ノ和荒に、種々の意ありて、荒金荒玉などの類は、物の生れるまゝにて、未修治を加へぬを云、其に對へて修治たる物を、和某と云、といひ、或は又

疎を阿羅と云ことは多けれども、其對に密を爾岐と云ことは未思得ず、爾岐波布など是々に近し、又剛柔の柔をば爾岐と云へども、其對の剛を阿羅と云ることはなし、柔の對の阿羅は、強暴などの字に當れり。

と述べてゐることを思ひ出さねばなるまい。成程隆正の神道説は宣長の學とは頗る異つたもの、全く別様のもの、全く對立的なものとなさへ見える。しかしながら隆正の神道説展開の根幹的方法、最も特徴ある重要な方法は反對の理であると考へられるのである。今これを見來つた我々はその同じ目で古事記伝における宣長の荒・和二魂の説を仔細に見るとき、既にそこに隆正の反對の理が、いやその萌芽があらはれてゐることを發見するのである。隆正の神道が宣長の學と全く異つた様相を呈してゐるものであること、むしろ對照的なものであることは認めなければなるまい。しかし隆正自身何といはうともその根幹の部

分においては正しく宣長の學に見られる萌芽の發展であり生長であるのである。この点において、隆正は正に宣長の學徒であつたのである。実に隆正は「隆正、それらの英傑（宣長篤胤）の後にうまれて、その教にしたがひ、また別におもひ得たることありて本學神理を世におこさんとするものであつた」のである。

注① 昭和十五年九月、平凡社版

② 神道史研究 第十卷第三号、小川常人氏の論考参照

③ 吉川弘文館版 本居宣長全集 第三、古事記伝 三十一

④ 同 右 一五九二頁

⑤ 同 右 一五九二頁

⑥ 同 右 一五八〇頁

⑦ 同 右 第六頁

⑧ 同 右 第四頁

⑨ 同 右 第五頁

⑩ 有光社版 大國隆正全集 第一卷本學舉要下 四八頁

⑪ 同 右 四九頁

⑫ 同 右 五〇頁

⑬ 同 右 三九頁

⑭ 同 右 五一頁

⑮ 同 右 五二頁

⑯ 同 右 五五頁

⑰ 同 右 五七頁

⑱ 同 右 七七頁

⑲ 同 右 七七頁

⑳ 同 右 二一七頁

㉑ 同 右 二一八頁

㉒ 同 右 二一五頁

第一卷駁我問答上
第四卷魂魄辨

③6 ③5 ③4 ③3 ③2 ③1 ③0 ②9 ②8 ②7 ②6 ②5 ②4 ②3 ②2
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 右 右 右 右 右 右 右 右 右 右 右 右 右 右 右

第六卷古伝通解 四 一九三頁
 第一卷本学舉要上 三頁
 第一卷駁我問答下 一一一頁
 第一卷本学舉要下 六二頁
 第六卷古伝通解 五 二六七頁
 第五卷神理一貫書 五 二二五頁
 第四卷学運論卷一 四〇頁
 第四卷学統辨論 一五九頁
 第五卷神理一貫書 五 二二三頁
 第四卷神理入門用語訣上 二六七頁
 第四卷神理入門用語訣下 二八八頁
 第四卷神理入門用語訣下 三〇一頁
 第六卷古伝通解 四 二二三頁
 第五卷本教神理説 二 六九頁